

日蓮大聖人御書全集

ほんぞんもんどうしよ

本尊問答抄

新版
302
〜
315

本尊問答抄

こうあんがんねん

がつ

さい

じょうけんぼう

弘安元年 ('78)

9月

57歳

浄顕房

と い まっだいあくせ ほんぷ なにもの ほんぞん さだ
問うて云わく、末代悪世の凡夫は何物をもつて本尊と定む

へきや。

こた い ほけきょう だいもく ほんぞん
答えて云わく、法華経の題目をもつて本尊とすべし。

と い きょうもん にんし しゃく
問うて云わく、いずれの经文、いずれの人師の釈にか出

でたるや。

こた ほけきょう だいし ほっしほん い やくおう
答う。法華経の第四の法師品に云わく「薬王よ。いたる

ところにて、もしは説き、もしは読み、もしは誦し、もし

か

きようがん

じゆう

ところ

みなまさ

は書き、もしは経卷の住するところの処には、皆応に

しつぼう

とう

た

きわ

こうこうごんじき

しやり

七宝の塔を起て、極めて高広嚴飾ならしむべし。また舍利を

あん

もち

ゆえん

なか

安んずることを須いず。所以はいかん。この中には、すで

によらい

ぜんしんいま

とううんぬん

ねはんぎよう

だいし

に如来の全身有せばなり」等云々。涅槃経の第四の

によらいしようほん

い

つぎ

かしよう

しよぶつ

し

如来性品に云わく「また次に、迦葉よ、諸仏の師とすると

ほう

ゆえ

によらい

くぎよう

くよう

ころは、いわゆる法なり。この故に、如来は恭敬・供養す。

ほうつね

ゆえ

しよぶつ

つね

うんぬん

法常なるをもつての故に、諸仏もまた常なり」云々。

てんだいだいし

ほつけざんまい

い

どうじよう

なか

よ

天台大師、法華三昧に云わく「道場の中において、好き

こうざ

し

ほけきよういちぶ

あんち

かなら

高座を敷き、法華経一部を安置せよ。またいまだ必ずしも

ぎようぞう しやり よ きようてん あん もち
形像・舍利ならびに余の經典を安んずることを須いず。

ほけきよういちぶ お とうりんぬん
ただ法華經一部のみを置け」等云々。

うたが い てんだいだいし まかしかん だいに ししゅぎんまい
疑つて云わく、天台大師の摩訶止觀の第二の四種三昧の

ごほんぞん あみだぶつ ふくうさんぞう ほけきよう かんち ぎき
御本尊は阿弥陀仏なり。不空三蔵の法華經の觀智の儀軌は、

しやか たほう ほけきよう ほんぞん なんじ なん
釈迦・多宝をもつて法華經の本尊とせり。汝、何ぞこれら

ぎ そうい
の義に相違するや。

こた い わたくし ぎ かみ い
答えて云わく、これ私の義にあらず。上に出だすところ

きようもん てんだいだいし おんしゃく まかしかん
ろの經文ならびに天台大師の御釈なり。ただし、摩訶止觀

ししゅぎんまい ほんぞん あみだぶつ かれ じようぎ じようぎよう
の四種三昧の本尊は阿弥陀仏とは、彼は常坐・常行・

ひぎょうひぎ

さんしゅ

ほんぞん

あみだぶつ

もんじゅもんぎょう

非行非坐の三種の本尊は阿弥陀仏なり。文殊問経・

はんじゅざんまいきょう

しょうかんのんぎょうとう

にぜん

しよきょう

うち

般舟三昧経・請観音経等による。これは爾前の諸経の内、

みけんしんじつ

きょう

はんぎょうはんざざんまい

ふた

いち

未顕真実の経なり。半行半坐三昧には二つあり。一には

ほうどうきょう

しちぶつ

はちぼさつとう

ほんぞん

か

きょう

に

方等経の七仏・八菩薩等を本尊とす。彼の経による。二に

ほけきょう

しやか

たほうとう

ひ

たてまつ

ほつけざんまい

は法華経の釈迦・多宝等を引き奉れども、法華三昧をも

あん

ほけきょう

ほんぞん

ふくうさんぞう

ほつけぎき

つて案ずるに、法華経を本尊とすべし。不空三蔵の法華儀軌

ほうとうほん

もん

ほけきょう

きょうしゅ

ほんぞん

は、宝塔品の文によれり。これは法華経の教主を本尊とす。

ほけきょう

しやうい

法華経の正意にはあらず。

かみ

あ

ほんぞん

しやか

たほう

じつぼう

しよぶつ

上に挙ぐるところの本尊は、釈迦・多宝・十方の諸仏の

ごほんぞん ほけきょう ぎょうじや しょうい
御本尊、法華経の行者の正意なり。

と い にほんこく じっしゅう

くしゃ

問うて云わく、日本国に十宗あり。いわゆる俱舎・

じょうじつ りつ ほつそう さんろん げこん しんごん じょうど ぜん ほつけしゅう

成実・律・法相・三論・華嚴・真言・浄土・禅・法華宗な

しゅう みなほんぞん くしゃ じょうじつ

り。この宗は、皆本尊まちなり。いわゆる俱舎・成実・

りつ さんしゅう れつおうじん しょうしやか ほつそう さんろん にしゅう

律の三宗は劣応身の小釈迦なり。法相・三論の二宗は

だいしやかぶつ ほんぞん げこんしゅう だいじょう 廬舎那ほうしん しやか

大釈迦仏を本尊とす。華嚴宗は台上のるさな報身の釈迦

によらい しんごんしゅう だいにちによらい じょうどしゅう あみだぶつ ぜんしゅう

如来。真言宗は大日如来。浄土宗は阿弥陀仏。禅宗にも

しやか もち なん てんだいしゅう ひと ほけきょう ほんぞん

釈迦を用いたり。何ぞ天台宗に独り法華経を本尊とするや。

こた かれ ほとけ ほんぞん きょう ほんぞん

答う。彼らは仏を本尊とするに、これは経を本尊とす。

その義ぎあるべし。

問とう。その義ぎ、いかん。仏ほとけと経きようといずれか勝れたるや。
すぐ

答こたえて云いわく、本尊ほんぞんとは勝れたるを用もちいるべし。例れいせば

儒家じゆかには三皇五帝を用もちいて本尊ほんぞんとするがごとく、仏家ぶつかけにも

また釈迦しゃかをもつて本尊ほんぞんとすべし。

問とうて云いわく、しからば、汝なんじ、いかんぞ、釈迦しゃかをもつて

本尊ほんぞんとせずして、法華経ほけきようの題目だいもくを本尊ほんぞんとするや。

答こたう。上かみに挙あぐるところの経きよう釈しゃくを見給みたまえ。私わたくしの義ぎに

はあらず。釈尊しゃくそんと天台てんだいとは、法華経ほけきようを本尊ほんぞんと定め給さだえり。
たま

まつだいいま にちれん ほとけ てんだい

末代今の日蓮も、 仏と天台とのごとく、 法華経をもつて

ほんぞん ゆえ ほけきよう しゃくそん ふぼ しょうぶつ

本尊とするなり。 その故は、 法華経は釈尊の父母、 諸仏の

がんもく しゃか だいにち そう じつぼう しょうぶつ ほけきよう

眼目なり。 釈迦・大日、 総じて十方の諸仏は、 法華経より

しゅつしよう たま ゆえ いま のうしよう ほんぞん

出生し給えり。 故に今、 能生をもつて本尊とするなり。

と しょうご

問う。 その証拠、 いかん。

こた ふげんぎよう い だいじようきようてん しょうぶつ ほうぞう

答う。 普賢経に云わく「この大乘經典は、 諸仏の宝蔵な

じつぼうさんぜ しょうぶつ がんもく さんぜ もろもろ によらい しゅつしよう

り。 十方三世の諸仏の眼目なり。 三世の 諸の如来を出生

たね とううんぬん い ほうごうきよう しょうぶつ

する種なり」等云々。 また云わく「この方等経は、 これ諸仏

まなこ しょうぶつ よ ごげん ぐ え

の眼なり。 諸仏はこれに因つて五眼を具することを得たま

ほとけ　さんしゅ　み　ほうどう　しょう　だいほういん

えり。仏の三種の身は、方等より生ず。これ大法印なり。

ねはんかい　いん　かいちゆう　よ　さんしゅ　ほとけ

涅槃海を印す。かくのごとき海中より能く三種の仏の

しょうじよう　み　しょう　さんしゅ　み　にんてん　ふくでん　おうぐ

清浄の身を生ず。この三種の身は、人天の福田、応供の

なか　さい　とううんぬん　きようもん　ほとけ　しょう　ほけきよう

中の最なり」等云々。これらの経文は、仏は所生、法華経

のうしょう　ほとけ　み　ほけきよう　たましい　すなわ

は能生。仏は身なり、法華経は神なり。しからば則ち

もくぞう　えぞう　かいげんくよう　ほけきよう

木像・画像の開眼供養はただ法華経にかぎるべし。しかる

いま　もくえ　にぞう　設　だいにちぶつげん　いん　しんごん

に、今、木画の二像をもうけて、大日仏眼の印と真言とを

かいげんくよう　ぎやく

もつて開眼供養をなすは、もつとも逆なり。

と　い　ほけきよう　ほんぞん　だいにちによらい　ほんぞん

問うて云わく、法華経を本尊とすると、大日如来を本尊と

すると、いずれか勝るるや。すぐ

答う。こた 弘法大師・慈覚大師・智証大師の御義のごとくな

らば、大日如来はすぐれ、法華経は劣るなり。だいにちによらい 勝 ほけきよう おと

問う。と その義ぎ、いかん。

答う。こた 弘法大師の秘蔵宝鑰の十住心に云わく「第八法華、

第九華嚴、第十大日経」等云々。これは浅きあさより深きふかに入

る。慈覚大師の金剛頂経の疏、蘇悉地経の疏、智証大師の

大日経指帰等に云わく「大日経第一、法華経第二」等云々。

問う。と 汝が意なんじ こころ、いかん。

こた しゃかによらい たほうぶつ そう じつぼう しょぶつ ごひようじよう
答う。 釈迦如来・多宝仏、総じて十方の諸仏の御評定に

のたま いこんとう いつさいきよう なか ほっけ もつと だいいち

云わく 「已今当の一切経の中に法華は最もこれ第一なり」

うんぬん
云々。

と いま にほんこくじゆう てんだい しんごんとう しょそごう おうしん

問う。今、日本国中の天台・真言等の諸僧ならびに王臣・

ばんみんうたが い にちれんほっし こうぼう じかく ちしようだいしとう

万民疑つて云わく「日蓮法師めは弘法・慈覚・智証大師等

すぐ

に勝るべきか」。いかん。

こた にちれん はんきつ い こうぼう じかく ちしようだいしとう

答う。日蓮、反詰して云わく、弘法・慈覚・智証大師等は、

しゃか たほう じつぼう しょぶつ すぐ いち

釈迦・多宝・十方の諸仏に勝るべきか〈これ一〉。

いま にほんこく おう たみ きようしゆしゃくそん みこ

今、日本国の王より民までも、教主釈尊の御子なり。

しやくそん さいご ごゆいごん のたま

釈尊の最後の御遺言に云わく「法に依つて人に依らざれ」

とうらんぬん ほつけ もつと だいいち もう ほう よ

等云々。「法華は最も第一なり」と申すは法に依るなり。

さんだいしとう すぐ 宣 しょそう おうしん

しかるに、三大師等に勝るべしやとのたもう諸僧・王臣・

ばんみんないししよじゆう ぎゆうばとう ふこう こ

万民乃至所従、牛馬等にいたるまで、不孝の子にあらずや

に

〈これ二〉。

と こうぼうだいし ほけきよう みたま

問う。弘法大師は法華経を見給わずや。

こえ こうぼうだいし いっさいきよう よ たま

答う。弘法大師、一切経を読み給えり。その中に法華経・

けこんぎよう だいにちきよう せんじん しょうれつ よ たも ほけきよう よ

華嚴経・大日経の浅深・勝劣を読み給うに、法華経を読み

たも しょう もんじゆしり ほけきよう しょぶつによらい

給う様に云わく「文殊師利よ。この法華経は、諸仏如来の

ひみつ ぞう

しよきよう

なか

もつと

しも あ

秘密の蔵にして、諸経の中において最もその下に在り」。

よ たも よう

い

やくおう

いまなんじ

つ

わ と

また読み給う様に云わく「薬王よ。今汝に告ぐ。我が説く

しよきよう

きよう

なか

ほつけ

もつと

ところの諸経、しかもこの経の中において、法華は最も

だいさん

うんぬん

じかく

ちしようだいし

よ

たも

よう

い

第三なり」云々。また慈覚・智証大師の読み給う様に云わ

しよきよう

なか

もつと

なか

あ

もつと

く「諸経の中において最もその中に在り」。また「最も

だいに

とううんぬん

これ第二なり」等云々。

しやかによらい

たほうぶつ

だいにちによらい

いっさい

しよぶつ

ほけきよう

釈迦如来・多宝仏・大日如来・一切の諸仏、法華経を

いっさいきよう

あいたい

と

宣

ほつけ

もつと

だいいち

一切経に相對して説いてのたまわく「法華は最も第一な

と

のたま

ほつけ

もつと

かみ

あ

うんぬん

り」。また説いて云わく「法華は最もその上に在り」云々。

詮せんずるところ、釈迦しゃか・十方じつぽうの諸しよぶつ仏ぶつと、慈覚じかく・弘法こうぼう等の三大師さんだいし

と、いづれを本もととすべきや。ただ、事ことを日蓮にちれんによせて、釈迦しゃか・

十方じつぽうの諸しよぶつ仏ぶつには永ながく背そむいて三大師さんだいしを本もととすべきか、いかん。

問とう。弘法こうぼう大師だいしは讚岐さぬき国くにの人ひと、勤操ごんぞう僧そう正じやうの弟子でしなり。

三論さんろん・法相ほつそうの六宗ろくそうを極きわむ。去いぬる延暦えんりやく二十三年にじゅうさんねん五月ごがつ、桓武かんむ

天皇てんのうの勅宣ちよくせんを帯おびて漢土かんとに入り、順宗じゆんそう皇帝こうていの勅ちよくによつて

青龍寺せいりゆうじに入いつて、惠果けいかわじやう和尚しんごんに真言だいぼうの大法そうじやうを相承たまたし給たまえり。

惠果けいかわじやう和尚しんごんは、大日如来だい にち に よ ら いより七代しちだいになり給たもう。人ひとはかわれ

ども、法門ほうもんはおなじ。譬たとえば、瓶かめの水みずをなお瓶かめにうつすが

ごとし。大日如来と金剛薩埵・竜猛・竜智・金剛智・不空・
恵果・弘法との瓶は異なれども、伝うるところの智水は同じ
き真言なり。

この大師、彼の真言を習つて、三千の波濤をわたりて日本

国に付き給うに、平城・嵯峨・淳和の三帝にさずけ奉る。

去ぬる弘仁十四年正月十九日に東寺を建立すべき勅を

給わつて、真言の秘法を弘通し給う。しかれば、五畿七道、

六十六箇国・二つの島にいたるまでも、鈴をとり杵をにぎ

る人、たれかこの人の末流にあらざるや。

また、慈覚大師は、下野国の人、広智菩薩の弟子なり。

だいどうさんねん おんとしじゅうご

でんぎようだいし みでし

大同三年、御歳十五にして伝教大師の御弟子となりて、

えいざん

のぼ

じゅうごねん

あいだ

ろくしゅう

なら

ほつけ

しんごん

にしゅう

叡山に登って十五年の間、六宗を習い、法華・真言の二宗

なら

つた

じょうわごねんごにつとう

かんど

かいしやうてんし

ぎよう

を習い伝う。承和五年御入唐、漢土の会昌天子の御宇なり。

はっせん

げんじよう

ぎしん

ほうがつ

しゅうえい

しおんとう

てんだい

しんごん

せきがく

法全・元政・義真・法月・宗叡・志遠等の天台・真言の碩学

あ たてまつ

けんみつ

にどう

なら

きわ

たも

うえ

こと

に値い奉つて、顕密の二道を習い極め給う。その上、殊に

しんごん

ひきよう

じゅうねん

あいだ

く

つ

たも

だいにちによらい

真言の秘教は十年の間、功を尽くし給う。大日如来より

くだい

かしようがんねん

にんみゆうてんのう

おんし

にんじゆ

さいこう

は九代なり。嘉祥元年、仁明天皇の御師なり。仁寿・斉衡

こんごうちようきよう

そしつじきよう

にきよう

しよ

つく

えいざん

そうじいん

に金剛頂経・蘇悉地経の二経の疏を造り、叡山に総持院を

こんりゆう だいさん ぎす たも てんだい しんごん
建立して第三の座主となり給う。天台の真言、これより

始
はじまる。

ちしようだいし さぬきのくに ひと てんちようしねん おんとしじゆうし えいざん
また智証大師は、讃岐国の人、天長四年、御年十四、叡山

のぼ ぎしんかしよう みでし たも にほんこく ぎしん
に登り、義真和尚の御弟子となり給う。日本国にては義真・

じかく えんちよう べつとうとう しまとく はつしゆう なら つた い にんじゆ
慈覚・円澄・别当等の諸徳に八宗を習い伝え、去ぬる仁寿

がんねん もんとくてんのう ちよく たま かんど い せんそうこうてい
元年に文徳天皇の勅を給わつて漢土に入り、宣宗皇帝の

だいちゆうねんちゆう はつせん りようしよかしようとう しよだいし しちねん あいだけんみつ
大中年中に、法全・良諤和尚等の諸大師に七年の間顕密

にきようなら きわ たま い てんあんにねん ごきちよう もんとく
の二教習い極め給いて、去ぬる天安二年に御帰朝。文徳・

せいわとう こうてい おんし げん とう つぎ
清和等の皇帝の御師なり。いづれも、現のため当のため、月

のごとく日のごとく、代々の明主、時々だいだい めいしゆ じじ しんみん しんこうあま あの臣民、信仰余り有きえおこた 無 ゆえ ぐち いっさい しんり、帰依怠りなし。故に、愚癡の一切、ひとえに信ずるばかりなり。

誠に、「法に依って人に依らざれ」の金言まこと ほう よ にん よ きんげん そむ ほかを背かざるの外ほとけ こうぼうとう ひとは、いかでか、仏によらずして弘法等の人によるべきや。詮せんずるところ、その心こころいかん。

答こたう。夫れ、教主そ釈尊きやうしゆしやくそんの御入滅ごにゆうめついつせんねん一千年の間、月氏あいだに仏法ぶつぽうの弘通ぐつうせし次第しだいは、先さきの五百年ごひやくねんは小乗しょうじよう、後のちの五百年ごひやくねんはだいじよう しょうだい こんじつ あらせ大乘けんみつ さだ。小大・権実けんみつの諍あらそいはありしかども、顕密けんみつの定めは

微

かすかなりき。

ぞうほう

い

じゅうごねん

もう

かんど

ぶつぼうわた

はじ

像法に入つて十五年と申せしに、漢土に仏法渡る。始め

じゆどう

しやつきよう

じようろん

さだ

は儒道と釈教と諍論して定めがたかりき。されども、

ぶつぼう

漸

ぐつう

しやうだい

ごんじつ

じようろん出

来

仏法ようやく弘通せしかば、小大・権実の諍論いできたる。

甚

そうい

かんど

ぶつぼうわた

されども、いたくの相違もなかりしに、漢土に仏法渡つて

ろつびやくねん

げんそうこうてい

ぎよう

ぜんむい

こんごうち

ふくう

さんさんぞう

六百年、玄宗皇帝の御宇、善無畏・金剛智・不空の三三蔵、

がっし

い

たま

のち

しんごんしゆう

た

けごん

ほっけ

月氏より入り給いて後、真言宗を立てしかば、華嚴・法華

とう

しよしゆう

ほか

下

かみいちにん

しもばんみん

等の諸宗はもつての外にくだされき。上一人より下万民に

いた

しんごん

ほけけよう

うんでい

おも

至るまで、「真言には法華経は雲泥なり」と思いしなり。そ

のち とくそうこうてい ぎょう みようらくだいし もう ひと しんごん

の後、徳宗皇帝の御宇に、妙楽大師と申す人、「真言は

ほけきょう 強 劣 思

法華経にあながちにおとりたり」とおぼしめししかども、

甚 た ほつけ しんごん しょうれつ わきま

いたく立つることなかりしかば、法華・真言の勝劣を弁

ひと

える人なし。

にほんこく んのうさんじゅうだいきんめい おんとき ひやくさいこく ぶつぼうはじ

日本国は人王三十代欽明の御時、百济国より仏法始め

わた わた はじ かみ ほとけ じようろん 強

て渡りたりしかども、始めは神と仏との諍論こわくして

さんじゅうよねん 過

三十余年はすぎにき。

さんじゅうしだいすいこてんのう ぎょう しょうとくだいしはじ ぶつぼう ぐつう

三十四代推古天皇の御宇に、聖徳太子始めて仏法を弘通

たも えかん かんろく ふう しょうにん ひやくさいこく 渡

し給う。恵灌・観勒の二りの上人、百济国よりわたりて

さんろんしゅう ひろ こうとく ぎよう どうしやう ぜんしゅう てんむ

三論宗を弘め、孝徳の御宇に、道昭、禪宗をわたす。天武

ぎよう しらぎこく ちほう ほつそうしゅう だいしじゅうしだい

の御宇に、新羅国の智鳳、法相宗をわたす。第四十四代

げんしやうてんのう ぎよう ぜんむいさんぞう だいにちきやう

元正天皇の御宇に、善無畏三蔵、大日経をわたす。しか

ひろ しょうむ ぎよう しんじやうだいとく ろうべんそうじやうとく

れども弘めず。聖武の御宇に、審祥大徳・良弁僧正等、

けごんしゅう にんのうしじゅうろくだいこうけんてんのう ぎよう とうだい

華嚴宗をわたす。人王四十六代孝謙天皇の御宇に、唐代の

がんじんわじやう りっしゅう ほつけしゅう りつ 弘 ほつけ

鑑真和尚、律宗と法華宗をわたす。律をばひろめ、法華を

ひろ

ば弘めず。

だいがじゅうだいかん むてんのう ぎよう えんりやくにじゅうさんねんしちがつ でんぎやう

第五十代桓武天皇の御宇に、延暦二十三年七月、伝教

だいし ちよく たま かんど わた みやうらくだいし みでしどうざい

大師、勅を給わって漢土に渡り、妙楽大師の御弟子道邃・

ぎようまん あ たてまつ ほつけしゆう じよう え つた どうせんりつし

行満に値い 奉 っ て法華宗の定・慧を伝え、道宣律師に

ぼさつかい つた じゆんぎようわじよう もう ひと しんごん ひきよう なら

菩薩戒を伝え、順 曉 和尚と申せし人に真言の秘教を習い

つた にほんこく かえ たま しんごん ほつけ しようれつ かんど

伝えて、日本国に帰り給いて「真言・法華の勝劣は、漢土

し 教 さだ がた おぼ

の師のおしえによつては定め難し」と思しめしければ、こ

だいにちきよう ほけきよう か しゃく しゃく ひ

こにして、大日経と法華経と、彼の釈とこの釈とを引き

なら しようれつ はん たま だいにちきよう ほけきよう おと

並べて勝劣を判じ給いしに、「大日経は法華経に劣りたる

だいにちきよう しょ てんだい こころ

のみならず、大日経の疏は天台の心をとりに我が宗に入

かんが たま

れたりけり」と勘え給えり。

のち こうぼうだいし しんごんきよう くだ

その後、弘法大師、真言経を下されけることを遺恨とや

いこん

おぼ

しんごんしゅう

た

謀

ほけきょう

思しめしけん、真言宗を立てんとたばかりて、「法華経は

だいにちきよう おと

けごんぎよう おと

うんぬん

大日経に劣るのみならず、華嚴経に劣れり」と云々。あわ

じかく ちしよう えいざん おんじよう

ぎ 許

こうぼうだいし

れ、慈覚・智証、叡山・園城にこの義をゆるさずば、弘法大師

びやつけん にほんこく

広

か りようだいし

けごん

の僻見は日本国にひろまらざらまし。彼の両大師、華嚴・

ほつけ しょうれつ

許

ほつけ

しんごん

しょうれつ

なが

法華の勝劣をばゆるさねど、法華・真言の勝劣をば永く

こうぼうだいし どうしん

ぞんがい

もと

でんぎようだいし

だいおんてき

弘法大師に同心せしかば、存外に本の伝教大師の大怨敵と

なる。

のち にほんこく

しよせきとくとう

おのおのち

えたか

その後、日本国の諸碩徳等、各智慧高くあるなれども、

か さんだいし 超

いま

しひやくよねん

あいだ

にほんいちどう

彼の三大師にこえざれば、今に四百余年の間、日本一同に

しんごん ほけきよう すぐ

さだ お

「真言は法華経に勝れけり」と定め畢わんぬ。たまたま

てんだいしゆう

なら

ひとびと

しんごん

ほつけ

およ

よしそん

天台宗を習える人々も、真言は法華に及ばざるの由存せど

てんだい

ぎす

おむろとう

こうき

恐

もう

も、天台の座主・御室等の高貴におそれて申すことなし。

ぎ

弁

辛

あるはまた、その義をもわきまえぬかのゆえに、からくし

どう

ぎ

いっこうしんごんし

思

て同の義をいえば、一向真言師は、「さること、おもいもよ

らず」とわらうなり。

にほんこくじゆう

すうじゆうまん

じしや

みな

しんごんしゆう

しかれば、日本国中に数十万の寺社あり。皆、真言宗

ほつけしゆう

なら

しんごん

しゆ

ほつけ

なり。たまたま法華宗を並ぶとも、真言は主のごとく、法華

しよじゆう

けんかく

ひと

しんちゆう

いちどう

は所従のごとくなり。もしは兼学の人も、心中は一同に

しんごん

ざす

ちょうり

けんぎよう

べつとう

いつごう

しんごん

真言なり。座主・長吏・検校・別当、一向に真言たるうえ、

かみ この

しもみな

従

いちにん

漏

上に好むところ下皆したがうことなれば、一人ももれず

しんごんし

にほんこく

くち

ほけきようさいだいいち

真言師なり。されば、日本国、あるいは口には法華経最第一

読

こころ

さいだいに

さいだいさん

しん く

とはよめども、心は最第一・最第三なり。あるいは身・口・

いとも

さいだいに

さん

さんごうそうおう

さいだいいち

よ

ほけきよう

意共に最第二・三なり。三業相応して最第一と読める法華経

ぎようじゃ

しひやくよねん

あいだいちにん

のうじしきよう

の行者は、四百余年が間一人もなし。まして「能持此経」

ぎようじゃ

覚

によらいげんざい

ゆたおんしつ

の行者は、あるべしともおぼえず。「如来現在・猶多怨嫉・

きようめつどご

しゅじよう

かみいちにん

しもばんみん

況滅度後」の衆生は、上一人より下万民にいたるまで

ほけきよう

だいおんてき

法華経の大怨敵なり。

にちれん とうかいどうじゅうごかく うち だいじゅうに あいあ

しかるに、日蓮は東海道十五箇国の内、第十二に相当た

あわのくにながさのこおりとうじょうのこうかたうみ あま こ しょうねんじゅうに

る安房国長狭郡東条郷片海の海人が子なり。生年十二

おな とう うち せいちようじ もう やま 罷 のぼ じゅう おんごく

同じき郷の内、清澄寺と申す山にまかり登り住しき。遠国

てら 名 そうち しゅがく ひと

なるうえ、寺とはなづけて候えども、修学の人なし。しか

ずいぶんしよこく しゅぎよう がくもん そうち わ み

るに、随分諸国を修行して学問し候いしほどに、我が身は

ふしよう ひと じっしゅう がんき しょうれつ

不肖なり、人はおしえず。十宗の元起・勝劣たやすく

弁 ぶつぼさつ きしよう いっさい

わきまえがたきところ、たまたま仏菩薩に祈請して、一切

きようろん かんが じっしゅう あ くしやしゅう せんごん

の経論を勘えて十宗に合わせたるに、俱舎宗は、浅近な

いちぶん しょうじょうきよう そうとう に じょうじっしゅう

れども一分は小乗経に相当するに似たり。成実宗は、

だいしょうけんぞう

みょうご

りっしゅう

もと

しょうじょう

なかごろ

だいじょう

大小兼雜して謬誤あり。律宗は、本は小乗、中比は大乗、

いま いったこう だいじょうしゅう

でんぎようだいし りっしゅう

今は一向に大乘宗とおもえり。また伝教大師の律宗あ

べつ なら

り。別に習うことなり。

ほつそうしゅう

みなもと

ごんだいじょうきよう

なか

せんごん

ほうもん

法相宗は、源、権大乘経の中の浅近の法門にてあり

しだい

ぞうちよう

ごんじつ

なら

けつく

か

しゅうじゅう

けるが、次第に増長して権実と並び、結句は彼の宗々を

う やぶ

ぞん

たと

にほんこく

しょうぐん

まさかど

すみとも

打ち破らんと存ぜり。譬えば、日本国の將軍、將門・純友

とう

しも

い

かみ

やぶ

等のごとし。下に居て上を破る。

さんろんしゅう

ごんだいじょう

くう

いちぶん

三論宗もまた権大乘の空の一分なり。これも「我は

じっだいじょう

われ

実大乘」とおもえり。

けごんしゆう

ごんだいじよう

い

よしゆう

勝

たと

華嚴宗は、また権大乘と云いながら余宗にまされり。譬

せつしゆう

かんぱく

ほけきよう

かたき

えば、摂政・関白のごとし。しかれども、法華経を敵と

た

しゆう

ゆえ

しんか

み

だいおう

じゆん

なして立つる宗なる故に、臣下の身をもつて大王に順ぜ

んとするがごとし。

じようどしゆう

もう

ごんだいじよう

いちぶん

ぜんどう

ほうねん

浄土宗と申すも、権大乘の一分なれども、善導・法然が

謀

賢

しよきよう

あ

かんぎよう

くだ

たばかりかしくして、諸経をば上げ観経をば下し、

しようぞう

き

あ

まつぼう

き

くだ

まつぼう

き

あいかな

正像の機をば上げ末法の機をば下して、末法の機に相叶え

ねんぶつ

と

い

き

きよう

う

いちだい

しようぎよう

る念仏を取り出だして機をもつて経を打ち、一代の聖教

うしな

ねんぶつ

いちもん

た

たと

こころ

賢

を失つて念仏の一門を立てたり。譬えば、心かしくし

て身は卑しき者が、身を上げて心はかなきものを敬つて、
賢人をうしなうがごとし。
けんじん 失

禅宗と申すは、「二代聖教の外に真実の法有り」と云々。
ぜんしゅう もう いちだいししょうぎよう ほか しんじつ ほうあ うんぬん
譬えば、おやを殺して子を用い、主を殺せる所従の、しか
たと ころ こ もち しゆ ころ しよじゅう
もその位につけるがごとし。
くらい 即

真言宗と申すは、一向に大妄語にて候が、深くその
こんげん 隠 そうら せんき ひと 顕
根源をかくして候えば、浅機の人あらわしがたし。一向に
おうわく そうねん へ そうろう てんじく しんごんしゅう もう
誑惑せられて数年を経て候。まず天竺に真言宗と申す
しゅう
宗なし。しかるに「有り」と云々。その証拠を尋ぬべきな
あ うんぬん しょうご たず

せん

だいにちきよう

渡

ほけきよう

ひ

り。詮せんずるところ、大日経だいにちきようここにわたれり。法華経ほけきように引き

む

しようれつ

み

だいにちきよう

ほけきよう

向かえてその勝劣しようれつこれを見るところに、大日経だいにちきようは法華経ほけきよう

しちじゆうげれつ

きよう

しようこ

か

きよう

きよう

ふんみよう

より七重下劣の経しちじゆうげれつなり。証拠しようこは、彼の経か、この経きように分明きよう

ひ

い

なりへここにこれを引ひかず。しかるを、あるいは云いわく

ほけきよう

さんじゆう

しゆくん

にじゆう

しゆくん

「法華経ほけきように三重さんじゆうの主君しゆくん」、あるいは「二重にじゆうの主君しゆくんなり」と

うんぬん

ほか

だいびやつけん

たと

りゆうそう

げれつ

み

云々。もつての外ほかの大僻見だいびやつけんなり。譬たとえば、劉聰りゆうそうが下劣げれつの身み

びんてい

うま

くち

ちようこう

たみ

み

よこ

として愍帝びんていに馬うまの口くちをとらせ、趙高ちようこうが民たみの身みとして横よこしま

てい

即

か

てんじく

だいまんばらもん

に帝位ていにつきしがごとし。また彼の天竺てんじくの大慢婆羅門だいまんばらもんが

しやくそん

とこ

せ

かんど

し

ひと

釈尊しやくそんを床とことして坐せせしがごとし。漢土かんどにも知る人ひとなく、

にほん

怪

しひやくよねん

送

日本にも、あやしめずして、すでに四百余年をおくれり。

ぶつぼう

じゃしようみだ

おうぼう

ようや

つ

かくのごとく仏法の邪正乱れしかば、王法も漸く尽きぬ。

けっく

くに

たこく

破

ぼうこく

結句は、この国、他国にやぶられて亡国となるべきなり。こ

にちれんひと

かんが

し

ゆえ

ぶつぼう

おうぼう

のこと日蓮独り勘え知れる故に、仏法のため、王法のため、

しよきよう

ようもん

あつ

いっかん

しよ

つく

こさいみようじの

諸経の要文を集めて一卷の書を造る。よつて故最明寺

にゆうどうどの

たてまつ

りつしようあんこくろん

な

しよ

入道殿に奉る。立正安国論と名づけき。その書にくわ

もう

ぐにん

し

がた

せん

げんしよう

しく申したれども、愚人は知り難し。詮ずるところ、現証

ひ

もう

を引いて申すべし。

にんのうはちじゆうにだい おきほうおう

もう

おうましま

い

そもそも人王八十二代隱岐法皇と申す王有しき。去ぬる

じようきゆうさんねんたいさいかのえみごがつじゆうごにち

いがのたろうほんがんみつすえ

う

承久三年太歳辛巳五月十五日、伊賀太郎判官光季を打ち

と かまくら よしとき 打 たま

かどで

捕りまします。鎌倉の義時をうち給わんとての門出なり。

ごきしちどう つわもの め

そうしゆうかまくら

ごんのだいぶよしとき

やがて五畿七道の兵を召して、相州鎌倉の権大夫義時を

う たま たも

かえ

よしとき

負

たま

打ち給わんとし給うところに、還つて義時にまけ給いぬ。

けつく わ み おきのくに 流

たいしににん

さどのくに

結句、我が身は隠岐国にながされ、太子二人は佐渡国・

あわのくに

たま

くぎようしちにん

くび

刎

阿波国にながされ給う。公卿七人はたちまちに頸をはねら

負 たま

こくおう

み

れてき。これはいかにとしてまけ給いけるぞ。国王の身と

たみ

よしとき

う

たま

たか

きじ

捕

ねこ

して民のごとくなる義時を打ち給わんは、鷹の雉をとり、猫

ねずみ

は

ねこ

食

の鼠を食むにてこそあるべけれ。これは猫のねずみにくら

われ、鷹たかの雉きじにとられたるようなり。

じょうぶく ちから っ

てんだい

しかのみならず、調伏、力を尽くせり。いわゆる、天台

ざす じえんそうじよう しんごん ちようじゃ にんなじ おむろ おんじようじ ちようり

座主・慈円僧正、真言の長者、仁和寺の御室、園城寺の長吏、

そう しちだいじ じゆうごだいじ ちえ かいぎよう にちがつ

ひほう

総じて七大寺・十五大寺、智慧・戒行は日月のごとく、秘法

こうぼう じかくとう さんだいし しんちゆう じんみつ だいほう じゆうごだん

は弘法・慈覚等の三大師の心中の深密の大法、十五壇の

ひほう ごがつじゆうくにち ろくがつ じゆうよつか

汗

秘法なり。五月十九日より六月の十四日にいたるまで、あせ

流 脳 碎 おこな

をながし、なずきをくだきて行いき。

さいご おむろ ししんでん にほんこく 渡

最後には、御室、紫宸殿にして、日本国にわたりていま

さんど おこな だいほう ろくがつようかはじ おこな

だ三度までも行わぬ大法、六月八日始めてこれを行おうほ

おな

じゅうよつか

かんとう

へいぐん

うじ

せた

押

渡

どに、同じき十四日に、関東の兵軍、宇治・勢多をおしわた

らくよう

う

い

さんいん

い

ど

たてまつ

ここのえ

ひ

して洛陽に打ち入って、三院を生け取り奉って、九重に火

はな

いちじ

しょうしつ

さんいん

さんごく

るざい

たてまつ

を放って一時に焼失す。三院をば三国へ流罪し奉りぬ。

くぎようしちにん

くび

斬

また公卿七人は、たちまちに頸をきる。しかのみならず、

おむろ

ごしよ

お

い

さいあい

でし

しょうに

せいたか

もう

御室の御所に押し入って、最愛の弟子の小児・勢多伽と申せ

責

出

つい

くび

斬

おむろた

おも

しをせめいだして、終に頸をきりにき。御室堪えずして思い

じ

たま

お

はは

し

わらへ

し

祈

死に給い畢わんぬ。母も死に、童も死ぬ。すべてこのいの

侍

ひと

幾

せんまん

知

し

りをたのみし人、いく千万ということをしらず死ににき。

生

甲斐

おむろ

いの

はじ

たま

ろくがつ

たまたまいきたるもかいなし。御室、祈りを始め給いし六月

ようか

おな

じゅうよつか

中

数

しちにち

まん

八日より、同じき十四日まで、なかをかぞうれば、七日に満

ひ

じける日なり。

じゅうごだん

ほう

もう

いちじきんりん

してんのう

ふどう

この十五壇の法と申すは、一字金輪・四天王・不動・

だいいとく

てんぼうりん

によいりん

あいぜんおう

ぶつげん

ろくじ

こんごうどうじ

大威徳・転法輪・如意輪・愛染王・仏眼・六字・金剛童子・

そんしょうおう

たいげん

しゅごきやうとう

だいほう

ほう

せん

こくてき

尊星王・太元・守護経等の大法なり。この法の詮は、国敵・

おうてき

もの

こうぶく

いのち

め

と

たましい

みつ

王敵となる者を降伏して、命を召し取って、その魂を密

ごんじやうど

遣

ほう

ぎやうじや

ひとびと

かる

厳浄土へつかわすという法なり。その行者の人々もまた軽

てんだいざす

じえん

とうじ

おむろ

みい

じやうじゆういん

そうじやう

からず。天台座主・慈円、東寺、御室、三井の常住院の僧正

とう

しじゆういちにん

ばんそうとうさんびやくよにん

うんぬん

等の四十一人、ならびに伴僧等二百余人なり云々。

ほう

ぎょうじや

よ

じょうだい

法ほうとよいい、行者ぎょうじやとよいい、また代よも上代じょうだいなり。いかにと

負たまたま

勝たまたま

そくじ

してまたまたまけ給たまたまいけるぞ。たといたまたまかつことこそなくとも、即時そくじに

負

恥たまたま遭たまたま

またまたまけおわりて、かたまたまかるはじにあたまたまいたりけること、いかなる

故

よにん

知

こくしゆ

たみ

う

ゆえたまたまといたまたまうことを、余人よにんいまだたまたましらず。国主こくしゆとして民たみを討うた

たか

とり

捕

負

たも

んこと、鷹たかの鳥とりをとらんがたまたまごとし。たといたまたままたまたまけ給たまたまうとも、

いちねんにねん

じゆうねんにじゆうねん

支

ごがつじゆうごにち

一年二年、十年二十年もたまたまささうべきぞかし。五月十五日に

起

ろくがつじゆうよつか

負

たまたま

さんじゆうよにち

おたまたまこりて六月十四日にたまたままたまたまけ給たまたまいぬ。わずかに三十余日なり。

ごごんのだいぶどの

か

知

きとう

構

権大夫殿はこのことか兼ねてかしらねば、祈禱きとうもなし、かまかえ

もなし。

しかるに、日蓮、小智をもつて勘えたるに、その故あり。

にちれん しょうち かんが ゆえ
か しんごん じゃほう ゆえ ひがごと いちにん

いわゆる彼の真言の邪法の故なり。僻事は、一人なれども

ばんこく 煩 いちにん ぎよう 破
いっこくにこく

万国のわずらいなり。一人として行ずとも、一国二国やぶ

さんびやくよにん こくしゆ ほけきよう

れぬべし。いわんや三百余人をや。国主とともに法華経の

だいおんてき 亡 だいあくほう

大怨敵となりぬ。いかでかほろびざらん。かかる大悪法、

年 経 漸 かんとう 落 くだ しよどう べつとう ぐそう

としをへて、ようやく関東におち下つて、諸堂の別当・供僧

れんれん ぎよう もと へんいき ぶし きようほう

となり、連々と行ぜり。本より辺域の武士なれば、教法の

じゃしよう し さんほう 崇 おも

邪正をば知らず。ただ三宝をばあがむべきこととばかり思

じねん もち 漸 ねんすう

うゆえに、自然としてこれを用いきたりて、ようやく年数を

ふ いまたこく 責 被 く に 亡

経るほどに、今他国のせめをこうむつて、この国すでにほろ

かんとうはちかこく

えいざん

とうじ

おんじよう

びなんとす。関東八箇国のみならず、叡山・東寺・園城・

しちじとう

ざす

べつとう

みな

かんとう

おん

計

七寺等の座主・別当、皆、関東の御はからいとなりぬるゆ

おきのほうおう

だいあくほう

だんな

な

さだ

たま

えに、隠岐法皇のごとく、大悪法の檀那と成り定まり給い

ぬるなり。

こくしゆ

だいしよう

みな

ぼんのう

たいしやく

にちがつ

してん

国主となることは、大小、皆、梵王・帝釈・日月・四天

おん 計

ほけきよう

おんてき

さだ

たま

の御はからいなり。法華経の怨敵となり定まり給わば、た

じぼつ

由

ちか

たま

にんのう

ちまちに治罰すべきよしを誓い給えり。したがつて、人王

はちじゆういちだいあんとくてんのう

だいじようのにゆうどう

いちもんよりき

ひようえのすけ

八十一代安徳天皇に太政入道の一門与力して、兵衛佐

よりともしょうぶく

えいざん

うじでら

さだ

さんおう

うじがみ

頼朝を調伏せんがために、叡山を氏寺と定め、山王を氏神

侍

あんとく

さいかい

しず

みょううん

よしなか

ころ

とたのみしかども、安徳は西海に沈み、明雲は義仲に殺さ

いちもんみないちじ

滅

お

だいにど

こんど

る。一門皆一時にほろび畢わんぬ。第二度なり。今度は

だいさんど 当

第三度にあたるなり。

にちれん

諫

おんもち

しんごん

あくほう

だいもうこ

日蓮がいさめを御用いなくて、真言の悪法をもって大蒙古

じょうぶく

にほんこくかえ

じょうぶく

かえ

を調伏せられれば、日本国還つて調伏せられなん。「還つて

ほんにん っ

と

もう

すなわ

ばち

本人に著きなん」と説けりと申すなり。しからば則ち、罰を

りしやう

おも

ほけきやう

過

ほとけ

成

だいでう

もつて利生を思うに、法華經にすぎたる仏になる大道はな

げんぜ

きとう

ひやうえのすけどの

ほけきやう

どくじゆ

かるべきなり。現世の祈禱は、兵衛佐殿、法華經を讀誦す

げんしよう

る現証なり。

どおり ぞん

この道理を存ぜることは、父母と師匠との御恩なれば、

ふぼ ししよう ごおん

父母はすでに過去し給い畢わんぬ。故道善御房は師匠にて

ふぼ かこ たま お こどうぜんのごぼう ししよう

おわしまししかども、法華経の故に地頭におそれ給いて、

ほけきよう ゆえ じとう 恐 たま

心中には不便とおぼしつらめども、外にはかたきのように

しんちゆう ふびん 思 そと 敵

にくみ給いぬ。後にはすこし信じ給いたるようにきこえし

憎 たま のち しん たま 聞

かども、臨終にはいかにやおわしけん、おぼつかなし。地獄

りんじゆう しょうじ 離 じごく

までは、よもおわせじ。また生死をはなるることはあるべ

しやうじ 離

しともおぼえず。中有にやただよいますすらんとなげか

覚 ちゆうう 漂 歎

しともおぼえず。中有にやただよいますすらんとなげか

し。

きへん

じとう

怒

とき

ぎじょうぼう

せいちようじ

い

貴辺は、地頭のいかりし時、義城房とともに清澄寺を出で

ひと

なん

ほけきよう

ごほうこう

ておわせし人なれば、何となくとも、これを法華経の御奉公

思

しょうじ

離

たも

とおぼしめして、生死をはなれさせ給うべし。

ごほんぞん

せそん

置

たま

のち

この御本尊は、世尊説きおかせ給いて後、

にせんにひやくさんじゅうよねん

あいだ

いちえんぶだい

うち

弘

二千二百三十余年が間、一閻浮提の内にいまだひろめたる

ひとそちら

かんど

てんだい

にほん

でんぎよう

知

人候わず。漢土の天台、日本の伝教、ほぼしろしめして、

弘

たま

とうじ

広

たも

いささかひろめさせ給わず。当時こそひろまらせ給うべき

とき

そちら

きよう

じようぎよう

むへんぎようとう

い

時にあたりて候え。経には上行・無辺行等こそ出でて

弘 たも み そうら み たま

ひろめさせ給うべしと見えて候えども、いまだ見えさせ給

にちれん ひと そうら 心 得 そうら

わず。日蓮はその人に候わねども、ほぼこころえて候え

じゆ ぼさつ い たも くち 粗 々

ば、地涌の菩薩の出でさせ給うまでの口ずさみにあらあら

もつ きようめつどご 矛 先 あ そうら

申して、況滅度後のほこさきに当たり候なり。願わくは、

くどく ふ ぼ ししよう いっさいしゆじよう えこう たてまつ

この功德をもつて、父母と師匠と一切衆生に回向し奉ら

きしようつかまつ そうら

んと祈請仕り候。

むね 知 ごふしん か 送

その旨をしらせまいらせんがために、御不審を書きおく

そうら たじ 捨 ごほんぞん みまえ

りまいらせ候に、他事をすてて、この御本尊の御前にし

いっこう ごせ 祈 たま そうら

て、一向に後世をものらせ給い候え。またこれより申さ

もう

んと存ぞんじ候そうろう。

いかにも御房ごぼうたち、

は計からい申もうさせ給たまえ。

日蓮にちれん

花押かおう